高松大学紀要, 27. 517～526

自尊感情の高さおよび安定性と帰属様式との関連

坪田雄二

本研究は，自尊感情と原因帰属の帰属様式との関連性を検討したものである。

人は，自分に対する評価を高めたい，あるいは下げたくないという動機を持つという考え方は，Rogers（1951），Epstein（1973）以来，広く知られている。このような動機が，人の様々な行動に影響を与える。例えば，Taylor, Wood & Litchman（1983）は，乳ガン患者の面接調査から，多くの患者が自分よりも重い症状の患者のことを思い浮かべ，自分はそうした患者よりもうまく病気に対処していると考える，下方比較といわれる現象を報告している。また，Brown（1986）は，対人認知において，自分を肯定的な属性を持つ者として記述する傾向があることを報告している。そして，Tesser（1988）は，上述の動機を満たすために，人が行う活動を，他者との心理的距離（closeness），自分と他者のパフォーマンスの差異（performance），その課題の重要度（relevance）という観点からまとめた，自己評価維持モデル（self evaluation maintenance model）を提唱している。

これら以外にも，自己の評価を維持するために関わるものとして，原因帰属があげられる。セルフ・サービング・バイアスとは，成功体験の原因を自己の能力や努力などの内的な原因に帰属し，失敗体験の原因を，課題の困難度や運などの外的な原因に帰属することによって，自己評価をより高める，あるいは失敗によって傷ついた評価をこれ以上，下げないことにつながる帰属の方略であり，セルフ・ハンディキャッピングとは，あらかじめ自分が失敗したときの原因と考えられるようなハンディキャップを作っておき，行動の結果，失敗した場合は，その原因に帰属（外的帰属）することで，自己評価の低下を防ぎ，また成功した場合には，その原因を内的に帰属することによって，不利な状況にも関わらず成功したとは，自分の能力もたいしたものだと考えることで，より自己評価を高める機能を持つ帰属の方略である。これらの例からもわかるように，肯定的な自己評価を維持するために，原因帰属の方法も異なってくるのである。

これまで，自己評価と原因帰属の関係を検討した研究があるが，その中でも，自己評価の高さと原因帰属に関連に関する研究は，鹿内（1978），坪田・越（1991）があげられる。鹿内（1978）は，課題遂行後に，成功，失敗をフィードバックし，能力，努力，課題の困

難度，運，調子のそれぞれに対する原因帰属を行わせるというものであった。そして，自己評価の高さおよび成功，失敗の２要因の影響を検討している。その結果，自尊感情の高さに関わらず，全般的に成功を外的な原因に，失敗を内的な原因に帰属する傾向をみいだしている。また，坪田・越（1991）は，失敗事態における原因帰属様式を帰属様式質問紙（ASQ）によって測定し，それと自尊感情の高さとの相関分析から，自尊感情の高い者ほど不安定な，そして特殊的な原因に帰属しやすい傾向をみいだしている。なお，ASQとは，Peterson, Sommel, Bayer, Abramson, Metalsky, & Seligman（1982）によって開発されたもので，個人の持つ帰属傾向が，どの程度内的か，安定的か，全体的かを測定するものである。上述の２つの研究では，自尊感情の高さの影響が異なっているが，これは，両者の帰属の測定による違いや自己評価の捉え方の違いなどが影響していると思われる。人の様々な過去経験に影響された長期的で一貫したものを問題にする場合には，特定の課題に対する帰属を求めた鹿内（1978）の方法よりもASQを用いて，状況を越え，一貫した帰属様式を捉えた坪田・越（1991）の方法の方が望ましいと思われる。そこで，本研究では，帰属様式をASQによって，自己評価を自尊感情によって測定した坪田・越（1991）にならって用いることとする。坪田・越（1991）の研究結果から，自尊感情の高さと帰属様式との関連の様相は，自尊感情の高い者は，不安定で，特殊的な原因に帰属しやすいことが予想される。

ところで，自尊感情が人の感情や行動にどのような影響を与えるのかに関しては，これまで多くの研究がなされているが，自尊感情の何が検討されてきたかをみてみると，その高さと安定性の２つに大別される。ここで，自尊感情の安定性の研究についてみてみよう。Waschull & Kernis（1996）は，自尊感情の不安定な子どもは，興味や好奇心，挑戦しようとする気持ちが低く，対人関係に関わる出来事の中で自尊感情が脅かされそうな場合に，より怒りを感じやすいことを報告している。Kugle, Clements, & Powell（1983）は，自尊感情の不安定な子どもは学業達成が低いことを報告している。これらから，自尊感情の安定性が人の行動に影響を与えることが示唆されるが，それでは，自尊感情の安定性と原因帰属との間にどのような関係が予測されるのであろうか。まず，全体性の次元から考えてみる。全体性の次元とは，原因がその状況に限られるものか，それともそれ以外の状況にも関わるものかに関する次元のことである。一方，自尊感情の不安定な者とは自分に対する評価が定まらず，ある時は自信に満ち，またある時は自信をなくすような人のことである。このように評価の一貫しない者は，特殊的な原因に帰属しやすいことが予想される。

なぜならば，成功あるいは失敗の原因を全体的な原因と考えると，それ以外の状況においてもその原因は存在するため，別の状況でも当該の結果と同様の結果となる可能性が高くなる。また，成功あるいは失敗の原因を特殊的な原因と考えると，別の状況ではその原因は存在しないため，次の機会に成功するか，失敗するかの予測がはっきりしない。将来の結果がある程度予測できる場合，成功すると思えばそれに取り組むだろうし，失敗すると思えばそれを回避しようとするだろう。そのため，失敗する可能性は低くなると思われる。一方，将来の予測ができないと，前者のような課題の選択（より成功確率の高いものを選ぶ）ができず，結果として失敗する可能性は前者に比べて高まると思われる。そのため，失敗によって自己評価が低下するといったことをより多く経験することになり，これが自尊感情の不安定さにつながることになると思われるからである。次に，安定性の次元について考える。安定性とは将来もその原因は同様のレベルで存在するか，それとも次はどうなるかわからないかに関する次元である。この場合も，安定的な原因と考えれば，将来の結果の予想が明確となり，不安定な原因と考えれば予測ができない。そのため，自尊感情の不安定な者は，不安定な原因と考えやすいことが予想される。そして，内在性の次元であるが，これは原因が自分の内的な原因か，あるいは自分の側にはない外的な原因かに関する次元である。この次元と自尊感情の安定性との関連は，原因を内的なものと考えるか，それとも外的なものと考えるかによって，将来の結果の予想が影響を受けないため，予測は不明である。

これまでのことをまとめると，本研究における仮説は次のようなものとなる。

1）自尊感情の高い者は，不安定な原因に帰属しやすい。

2）自尊感情の高い者は，特殊的な原因に帰属しやすい。

3）自尊感情の不安定な者は，特殊的な原因に帰属しやすい。

4）自尊感情の不安定な者は，不安定な原因に帰属しやすい。

自尊感情の高さおよび安定性と原因の内在性の次元との関連については，特定の仮説はもうけない。

なお，自己評価とは，自己の行動・態度に対する評価であり，自尊感情とは，自己の行動・態度に対する感情で，自己の現状に満足し，自信を持つ程度のことである。したがって，自己に対する肯定的な，あるいは高い評価を下すことは，自己に対する肯定的な感情を持つことと同義であると考えられるため，本研究では両者を同じものとして扱うこととする。

方　法

被 験 者　短大生女子29名。

手 続 き　自尊感情と帰属様式の質問紙を集団記名方式で実施した。自尊感情については，Rosenberg（1965）の自尊感情測定尺度を星野（1970）が和訳したものを用いて評定させた（5段階評定）。なお，この評定は週1回の講義の際に行い，計11回測定した。また，帰属様式については，ASQを和訳したものを用いた。これは，12の状況から構成されており，半数は望ましい結果を，残りの半数は望ましくない結果を示す状況で，それぞれの状況は，対人関係的な領域3つと課題関連的な領域の3つが含まれていた（Table 1）。これらの状況について，そのようになった原因と思われるものをひとつ記述させ，その原因の内在性，安定性，全体性，およびその状況の自分にとっての重要性について7段階で評定させた。

Table 1　本研究で用いた帰属様式質問紙の状況

望ましい結果
＜達成課題領域＞
大金持ちになった
とても望んでいた地位に挑戦し，それを手にいれた
出世した
＜親 和 領 域＞
友達に会い容姿をほめてもらった
自分の提案がたいへんほめられた
ボーイフレンドが親切にしてくれる
望ましくない結果
＜達成課題領域＞
かなりの間仕事を探していたが見つからなかった
大勢の前で重要な話をしたが，反応がなかった
まわりから期待された仕事を全てやることができなかった
＜親 和 領 域＞
悩みを持った友達がきたが，助けようとしなかった
友達に会ったが敵対的であった
デートをしたがうまくいかなかった

結　果

各尺度の得点化

自尊感情尺度に関しては，得点が高いほど自尊感情が高くなる方向に得点化し，坪田（1994）の結果をもとに，各評定ごとの自尊感情全体，積極的自尊感情，消極的自尊感情それぞれの１項目あたりの得点を算出した。そして，それらの平均値と標準偏差を求め，前者を自尊感情の高さと，後者を自尊感情の安定性とした（Table ２）。なお，各被験者の評定回数の範囲は，６回～12回で，平均 9.3回であった。

また，帰属様式については，得点が高いほど，内的で，安定的で，全体的になるように得点化し，結果の望ましさ別に，内在性，安定性，全体性の得点の平均値を求めた（Table ２）。

Table ２　各従属変数の平均値と標準偏差

	＜望ましい結果＞	＜望ましくない結果＞
内在性得点	4.76 (0.71)	4.55 (0.82)
安定性得点	4.89 (0.70)	5.03 (0.88)
全体性得点	5.07 (0.77)	4.98 (0.88)
	＜自尊感情の高さ＞	＜自尊感情の安定性＞
自尊感情全体	3.12 (0.48)	3.11 (1.18)
積極的自尊感情	2.70 (0.40)	1.38 (0.49)
消極的自尊感情	2.30 (0.46)	1.61 (0.59)

（　　）内の数値は標準偏差

帰属様式と自尊感情の関連性の検討

帰属様式の３次元の得点と自尊感情の高さおよび安定性との関連性を検討するため，結果の望ましさ別に，それらの間のPeasonの積率相関係数を求めた（Table ３）。その結果，望ましい結果においては，自尊感情の高さおよび安定性と帰属様式との間に有意な関連はみられなかった。また，望ましくない結果においては，自尊感情全体および消極的自尊感情の高さと帰属様式の安定性得点の間に有意な相関がみられた。そして，自尊感情全体および消極的自尊感情の高さと帰属様式の内在性および全体性得点の間，積極的自尊感情の高さと安定性得点の間，消極的自尊感情の安定性と安定性得点の間に有意な傾向がみられた。

Table 3　自尊感情と帰属様式の関連

	自尊感情の高さ			自尊感情の安定性		
	全　体	積極的	消極的	全　体	積極的	消極的
＜望ましい結果＞						
内在性得点	.140	.224	.092	−.041	−.201	.201
安定性得点	−.245	−.156	.288	.132	−.087	.015
全体性得点	−.148	−.221	−.065	−.049	−.206	−.009
＜望ましくない結果＞						
内在性得点	−.349†	−.287	−.337†	−.225	.094	−.101
安定性得点	−.466*	−.312†	−.485*	−.155	.170	−.352†
全体性得点	−.341†	−.244	−.347†	−.005	.140	−.205

*$p<.05$　†$p<.10$

なお，結果の望ましさごとの重要度の得点は，望ましい結果で5.49，望ましくない結果で5.06であり，両者の間に有意差がみられた（$t=3.04$, $p<.05$）。

考　察

本研究では，自尊感情の高さおよび安定性と帰属様式との間の関連性について検討した。その結果，自尊感情の高さについては，自尊感情の高い者は，望ましくない結果の原因を，外的で，不安定で，特殊的なものに帰属し，自尊感情の低い者は，内的で，安定的で，全体的な原因に帰属しやすい傾向があることが示され，仮説は支持された。このような帰属パターンはいずれも，現在の自尊感情の高さを維持する方向で働くものである。つまり，自尊感情の高い者は，失敗の原因を，不安定で，特殊的なものと考えることで，次の機会には成功する可能性を高く評価でき，自尊感情の低い者は，失敗の原因を，安定的で，全体的なものと考えることで，次の機会も失敗する可能性を高く評価してしまう。そのため，自尊感情の高い者は自信を持って次の課題に取り組むことができ，自尊感情の低い者は，できるだけ課題を回避しようとし，取り組む場合も自信を持って望むことができないということである。また，各帰属様式の得点と自尊感情全体との間にみられた関係が，消極的自尊感情と各帰属様式との関係に類似していることから，どちらかと言えば，これ以上，自尊感情を下げたくないという消極的自尊感情の方が，原因帰属に影響しているようであ

る。そして，自尊感情の安定性については，消極的自尊感情と安定性の間に有意な傾向がみられ，消極的自尊感情の不安定な者は，不安定な原因に帰属しやすいことが示されたのみであった。このような結果の原因として次のことが考えられる。それは，自尊感情の安定性の測定に関するものである。Kernis，Cornell，Sun，Berry，& Harlow (1993) やKernis，Grannemann，& Barclay（1989）などの自尊感情の安定性を扱った研究では，本研究と同様，複数回自尊感情を測定し，その標準偏差を安定性の測度としているが，彼らの研究では，約１週間の間に，その測定を行っている。一方，本研究では，最初の測定から最後の測定まで，ほぼ２カ月間かかっている。このような期間の違いが，結果に影響した可能性が考えられる。Rosenberg（1986）は，自尊感情の急速で短期的な変動であるbarometric in-stabilityと，長期的な期間で生じる緩やかな変動である baseline instabilityを区別すべきであると主張しており，Kernis et. al.（1989）は，自尊感情が脅威にさらされたとき，どのように対処するかは，baseline instabilityよりもbarometric instabilityの方が関わりが深いと述べている。本研究で要した期間が他の研究よりもかなり長いことを考えると，これら２つのinstabilityが本研究では混在していた可能性があろう。そのため，自尊感情の安定性と帰属様式との間に明確な関係がみられなかったのではないだろうか。今後の研究では，複数回の測定に要する期間を約１週間程度に短縮していくことを考慮する必要があろう。

次に，本研究では，望ましくない結果においてのみ自尊感情と帰属様式の間に関連があり，望ましい結果においては，自尊感情によって，帰属様式に違いはみられなかった。これは，Wills（1981）が述べているように，肯定的自己評価維持への動機は，自尊感情に対する脅威の存在するときに強くなることが原因であると考えられる。つまり，これは自尊感情を維持しようという動機はいつも働いているわけではなく，自己評価が危機にさらされたときにはじめてそれを維持しようとするということであり，本研究で用いた状況で自己評価が危機にさらされるのは，望ましくない結果の時のみだからである。

そして，帰属様式質問紙の状況文における各被験者が評定した重要度の違いに関して述べてみる。本研究では，結果の望ましさによって重要度が異なり，望ましい結果の状況の方がより重要であると評価されていた。容姿をほめてもらうといった状況が望ましい結果には含まれており，本研究の被験者である女性にとってはより重要であると思われるものがある一方で，望ましくない結果の達成課題領域では，仕事に関するものが含まれていた。これは，現在，学生である被験者にとっては，さほど実感がなく，重要でないと思われるようなものであろう。これらのことが重要度の評価に影響したと思われるが，いずれの重

要度も中立点（4点）を越える5点代の得点であり，どちらかと言えば重要であるという評価がされていることから，本研究の中心課題である自尊感情と帰属様式との関連には，大きな影響を与えなかったように思われる。

引用文献

Brown, J. D. 1986 Evaluations of the self and others : Self-enhancement biases in social judgements. *Social Cognition*, 4 , 353－376.

Epstein, S. 1973 The self-concept revisited : Or a theory of a theory. *American Psychologist*, 28, 404－416.

星野　命　1970　感情の心理と教育（一，二）　児童心理，24，1264－1283.

Kernis, M. , Grannemann, B. D. , & Barclay, L. C. 1989 Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 1013－1022.

Kernis, M. H., Cornell, D. P., Sun, C. R., Berry, A, & Harlow, T. 1993 There's more to self-esteem than whether it is high or low : The importance of stability of self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 1190－1204.

Kugle, C. L., Clements, R. O., & Powell, P. M. 1983 Level and stability of self-esteem in relation to academic behavior of second graders. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 201－207.

Peterson, C., Semmel, A., Baeyer, C., Abramson, L. Y., Metalsky, G. I., & Seligman, M. E. P. 1982 The attributional style questionnare. *Cognitive Therapy and Research*, 6 , 287－300.

Rogers, C. R. 1951 *Client-centerd therapy : Its current practice, implications and theory*. Houghton Mifflin.

Rosenberg, M. 1965 *Society and adolescent self image*. Princeton : Princeton University Press.

Rosenberg, M. 1986 Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls & A. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self* (Vol. 3 , pp107－135). Hillsdale, NJ : Erlbaum.

鹿内啓子　1978　成功・失敗の帰因作用に及ぼすself-esttemの影響　実験社会心理学研究，18，35－46.

Taylor, S. E. , Wood, J. , & Litchman, R. 1983 It could be worse : Selective evaluation as a response to victimization. *Journal of Social Issue*, 36, 19－40.

Tesser, A. 1988 Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L. Berkowitz (Ed.) , *Advances in experimental social psychology*, 21, New York : Academic Press.

坪田雄二　1994　自尊感情の安定性の測度に関する研究　高松短期大学紀要，24，1－9．

坪田雄二・越　良子　1991　自己評価と原因帰属の関連性の検討　広島大学教育学部紀要第１部（心理学），40，109－112.

Waschull, S. B. & Kernis, M. H. 1996 Level and stability of self-esteem as predictors of children's intrinsic motivation and reasons for anger. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22, 4 －13.

Wills, T. S. 1981 Downward comparison princeples in social psychology. *Psychological Bulletin*, 91, 245－271.

The relation between the level and stability of self-esteem and attributional style

Yuji Tsubota

Abstract

The present study examined the relation between the level and stability of self-esteem and attributional style. The author hypothesized that self-esteem highly correlated in its level and stability with a person's tendency to attribute behaviors to more uunstable and specific causes. Rosenberg's self-esteem scale and attributional style questionnares were administered to 29 female subjects. The stability of self-esteem was assessed through multiple assessments of self-esteem.

The hypothesis about relation between level of self-esteem and attibutional style was partially supported, whereas the hypothesis about stability was not supported. Finally the author suggested the need for more organized distinction of barometric instability between baseline instability.

高松大学紀要
第 27 号

平成９年３月20日　印刷
平成９年３月20日　発行

編集発行　高　松　大　学
高　松　短　期　大　学
〒761-01　高松市春日町960番地
TEL（0878）41－3255
FAX（0878）41－3064

印　　刷　株式会社　美巧社
高松市多賀町１－８－10
TEL（0878）33－5811